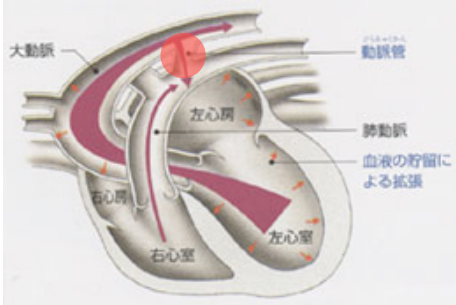


動脈管開存症

Patent Ductus Arteriosus (PDA)

この病気は恐らく犬で最も多く見られる先天性の心疾患として有名で、猫ではそれほど多くないことが知られています。

動脈管とは胎児の時にはまだ使われていない肺を迂回して肺動脈から大動脈へと血液を運ぶ血管で、通常は生まれると1週間以内に閉じて機能しなくなります。この動脈管が閉じずに残ってしまうのが動脈管開存症です。



根本的な治療は、外科的に開いたままの動脈管を閉鎖させる手術や、カテーテルを用いてコイルなどによって動脈管を閉塞させるコイル塞栓術を行います。

治療を行わなかった場合の1年生存率は30%と、かなり死亡率の高い病気です。ただし、早期に診断、治療すれば、健康な犬と全く同じ生活ができるようになります。



自宅での看護法

内科療法の場合は指示された薬をきちんと定期的に飲ませる必要が有ります。その他は主治医の先生の指示に従ってください。心臓疾患の場合は過度の運動が心臓に負担をかけることとなりますので、指示に従い制限をする必要もあるかもしれません。

原因

多因子的な遺伝的素因が疑われています。雄よりは雌で見られることが多い傾向にあります。犬の先天性心疾患の0.05%。

症状

症状は初期の段階では無症状なものから、体調不良、うっ血性心不全、虚脱、発作を起こしたりとその程度により様々です。また、運動するとすぐ疲れる、咳、呼吸困難などが見られることもあります。

症状は年齢が進むにつれて重症となります。通用早期に発見されなかった場合、1～2歳でうっ血性心不全や肺水腫を起こし、3歳までに重篤な心不全で亡くなってしまう場合がほとんどです。

診断法

まずはワクチンや健康診断で動物病院を訪れた時に聴診により心臓の雑音が発見されることが多い病気です。この病気は特徴的な心臓の雑音を示しますので、熟練した獣医師であればその雑音などだけで仮診断することもできます。

その後確定診断と病気の進行度をみるためには超音波検査、心電図検査、レントゲン検査などを行います。以前は心臓の造影検査などを行っていましたが、今ではカラードップラーとよばれる高性能な超音波検査器機が用いられるようになり安全で簡単に診断できるようになりました。



特徴的な心雑音[連続性雑音]を聞く▲

治療法

この病気は内科的には治療できる病気ではありませんが、症状を緩和、安定するために各種薬剤の投与を行います。

予防法

予防法はありませんが、早期に発見すれば治療により寿命をまっとうできる病気です。仔犬の飼育をはじめたらすみやかに動物病院を受診して健康診断を受けることがその手助けになるでしょう。



メモ

犬では、ミニチュア・シュナウザー(雌>雄)、シェットランド・シープ・ドッグ、ビションフリーゼ、プードル、マルチーズ、ヨークシャーテリア、ポメラニアン、ミニチュア・ダックスフンド、コーギー、スパニエル、ジャーマンシェパード、シベリアンハスキーなどに多く見られます。

猫では、シャム、ペルシャ、チンチラ、アメリカンショートヘアーに多く見られる病気です。